

強者の戦略

【江南地方は意外に盲点ですよ】

おはようございます、こんにちは、こんばんは。北林でございます。公式ブログにも書きましたが、最近携帯を iPhone に変えました。どきどきのスマートフォンデビューです。ただ、正直こうした機械には意外に強くなく（「スパルタン」をやっていると強いと思われてしまうのですが）、日々メールを打ち間違い、いろいろな方に迷惑をかけています（笑）。謎の電話がかかってきた先生方、すいません。

最近就職活動にもこうしたスマートフォンがないと難しいなどという話も聞きます。昨今の震災のときにはツイッターなどが活躍したという話も多くききます。何がいいかといいますが、私たちのような講師もいろいろな形で授業や情報を発信できないといけないなと思っているのです。

私は「スパルタン」の講座を担当させていただきます（世界史は夏からの開講です。しばしおまちを。）、E-Lecture という研伸館の E ラーニングシステムを使っていますが、これらもどんどんこうしたネットを活用してほしいし、また新しい形も模索していかないといけないなと思っています。

強者の戦略のHP もしっかりみて、その後は「スパルタン」一度体験してくださいね☆

《解説》

では長々と書きましたが、ここから解説に入ります。

江南の「江」とはもちろん「長江」のこと、もともとは河の南側を指すことばですが、中国で江南地方というと主に長江の下流域をさします。

ここは古代、黄河文明とは別の文明があったとされます。覚えていますか？センター試験でも出たことのある河姆渡遺跡もこうした長江の下流あたりにあり、長江文明があった証明の一つといわれています。

春秋・戦国時代には、呉や越がありました。三国時代にも呉があり、南北朝時代には漢民族が移住し、次第に開拓が進みます。隋の時代には運河が繋がります。

ちょっと時代が飛びますが、南宋は杭州、明ははじめ金陵（南京）を首都にしていました。中華民国も始まりは南京です。こうした地域は、南北朝時代以降、歴史の表舞台にしばしばあらわれ、経済の中心になっていきます。中国は華北・中原だけではないのです。

ところで、最初のタイトルに【江南地方は意外に盲点ですよ】と書きましたが、受験生にはなかなか思い浮かばないことも多いみたいなのですが、よく入試で狙われています。たとえば東京大学では 2007 年の第 1 問で、江南地方のことに触れる必要がありますし、2009 年の大阪大学にいたっては、今回の京都大学の課題とほぼ着眼点と同じだと思われる問題があります。

↓

中国（華北～華南）における経済的中心地の移動について、七世紀から一四世紀にいたる期間を対象に、下の用語をすべて使用しながら説明しなさい（一八〇字程度）。

大運河 江南 ムスリム商人 稲作 海運

強者の戦略

よく似ていますね。

今回課題に出したのは4世紀から12世紀ということで、世紀ごとにまとめるか、王朝ごとにまとめるのがいいかと思います。なかなか300字でまとめるのには骨が折れるのですが、チャレンジしてみてください。

以下の解説では、王朝ごとにどういった出来事があったか、整理してみましょう。

4世紀ということは301年から、12世紀ということは1200年までを想定します。

ということは、西晋から始まり、南宋の途中まで、ということになります。

まずは東京書籍の教科書の江南に関する文章を、そのままきりとってみますね。

長江流域一帯の江南の開発が本格化したのは、華北の混乱を逃れて、多くの人々が江南へと移り住んだ五胡十六国時代のことである。特に南朝の諸政権は、大地の間にため池をつくって水田を造成し、人々の定着をはかった。唐代では、長江下流域の山地の谷間に水田が新たに開発され、大量の米が大運河を通じて華北へと運ばれた。

遼や金の支配を逃れた人々も、江南へと移住した。宋代には、華北の水利・土木の技術が江南にも導入され、長江デルタ地帯まで開拓の手がのびた。新興の地主層(形勢戸)は、佃戸を駆使しての建設や干拓による水田造成を行った。低湿地には、大堤防で囲った「●田」や「囲田」、水路と堤防で干拓した「湖田」がつくられた。また11世紀ころ、占城稻という生長の早い稲がヴェトナム方面から伝えられ、大地や海岸部の水利の悪い土地に栽培されるようになった。こうして「江浙(蘇湖)熟すれば天下足る」といわれるように、長江下流域の江蘇・浙江の地方が、華北をしのぐ大穀倉地帯となった、同時に、江南では茶の栽培も盛んとなり、喫茶の風習が東アジアに普及し、茶は重要は輸出品となった。

これだけで答えができそうな感じです。実はほとんどの教科書によく記載がある内容です。教科書の熟読は絶対にはずさないでくださいね。論述に取り組み始めて間もない方は、教科書や用語集を見ながらの練習も大切なことです。

では、王朝ごとのポイントをあげてみます。

○西晋～五胡十六国・南北朝時代

八王の乱に乗じた五胡の侵入による混乱、永嘉の乱、西晋滅亡

→華北の人々が江南へ移り、司馬睿は建康を首都にして東晋を建国。以降江南の貴族・豪族は移民を受け入れ水田開発を進めた。土断法などもこの時代ですね。

○隋・唐

もちろん、大運河が完成が必要。江南と華北が繋がり、唐でも山地の谷間でも水田が開発され、大量の米が華北へ運ばれた。運河の目的は、華北の政治と江南の経済の結合・融合であることは、研伸館の授業でも言ってますね。また、唐代からは国際的な貿易も目立ってきます。実はタージャー(大食)とよばれるムスリムも訪れるなどしています。

強者の戦略

○北宋・南宋

遼や金から江南へ逃れた移民が増加します。貴族はこの時代没落し、新興地主勢力の形勢戸が佃戸を使い長江デルタ地帯の開発を進めていきました。畝田や●田、湖田などをつくり、ヴェトナムから占城稻が伝播・栽培され「蘇湖熟すれば天下足る」といわれる華北を凌ぐ穀倉地帯となっていくます。12世紀には杭州に南宋の首都がおかれますね。

唐代にくらべ宋代のほうが貿易や商業は盛んになります。都市でも商業が比較的自由になったのが宋代です。江南の明州や杭州では、唐代からの市舶司が置かれ、ムスリム商人や日本との貿易によって繁栄しました。茶・陶磁器・絹の生産も発展し、中国の主要産物となっています。

○ 明・清代は商工業が発達していきますが、今回の問題では入りませんので、割愛いたします。

さ、以上をうまくまとめてみましょう。

《解答例》

五胡の混乱や西晋滅亡で華北の人々が江南へ移り、司馬睿は建康を首都にして東晋を建国した。以降江南の貴族・豪族は移民を受け入れ水田開発を進めた。隋代に大運河が完成し江南と華北が繋がり、唐では山地の谷間でも水田が開発され、大量の米が華北へ運ばれた。また揚州などで海上貿易も栄えた。宋代には遼や金から逃れた移民が増加、形勢戸が佃戸を使い長江デルタ地帯の開発を進めた。畝田や●田、湖田などをつくり、占城稻が伝播・栽培され「蘇湖熟すれば天下足る」といわれる華北を凌ぐ穀倉地帯となった。明州や杭州には市舶司が置かれ、ムスリム商人や日本との貿易によって繁栄した。茶・陶磁器・絹の生産も発展し、中国の主要産物となった。

(300字)

●は「土へん」に「于」
